

生薬ニュース

近畿大学東洋医学研究所附属診療所調剤室

今月のピックアップ

ぶし 附子

局方ブシとは・・・

局方とは、「日本薬局方」という医薬品の公定書の中で、**ブシ**もこの書物に記されています。

ブシ：ハナトリカブト *Aconitum carmichaeli* Debeaux 又は オクトリカブト *A. japonicum* Thunberg (キンポウゲ科) の塊根を 1) 高圧蒸気処理、2) 食塩溶液に浸漬後、加熱

又は高圧蒸気滅菌処理、3) 食塩溶液に浸漬後、石灰を塗布する、等の加工法により製したものです。

ハナトリカブトは中国四川、陝西省などに産し、オクトリカブトの主な産地は北海道です。

【性味】 大辛、大熱、有毒

【薬能】 回陽救逆・補陽散寒・祛風湿・止痛

植物の中で最も強い毒性をもつが、重要な生薬として使われています。

ブシの成分と薬効・・・

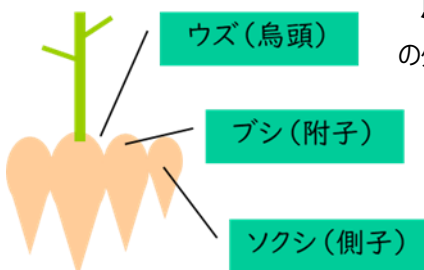
主な成分として、ブシジエステルアルカロイド：アコニチン、ジェサコニチン、ヒパコニチン、メサコニチンなどが含まれています。

薬理作用としては、鎮痛、強心、血管拡張作用などが知られています。

ブシの薬能としては、回陽救逆：衰弱した腎陽を強力に補い、強心・末梢循環改善・代謝亢進・脳の興奮性増大に働き、ショック状態を改善する作用や、補陽散寒：陽気を振奮させ血行を促進させ、表・裏の寒湿を除くことで、血管拡張、血行促進に働き、身体を温める作用があります。



生薬名の烏頭と附子・・・



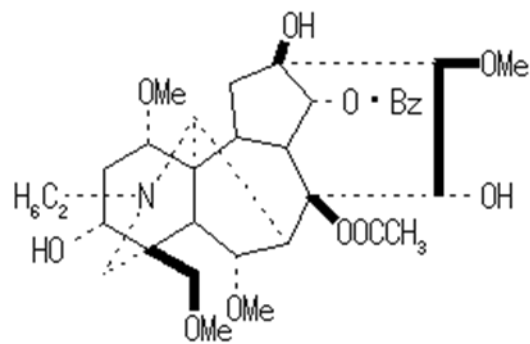
烏頭とは、左図の通り親イモのことであり、**附子**とは子イモのことを指します。さらに、その外側につく孫イモを側子、ということもあるようですが、一般的に流通するときは、**烏頭**か**附子**に分けられるようです。この**附子**が前述の通り加工され**局方ブシ**になります。ちなみに**烏頭**はカラスの頭部のような形状をしていることから命名され、植物名の**トリカブト**は、花の形が鳥兜、烏帽子（えぼし）に似ていることから命名されました。

トリカブトの毒性・・・

トリカブトは、生薬部位である塊根だけでなく、茎・葉、花、全てに有毒アルカロイド（アコニチンなど）を含んでいます。そのため、トリカブトとよく似ている山菜のニリンソウと間違えて誤食する中毒事故が散発し、ニュースになります。

中毒症状としては、初期に口舌のしびれ、嘔吐、下痢、流涎などが現れ、それから運動麻痺、知覚麻痺、痙攣、呼吸困難、不整脈などが起こり、最終的に死に至ることもあります。

そのため、附子は前述の通り加工法が定められ、加工することで安全に使用できるようかなり減毒されますが、それでも毒性は残っていますので、煎じ薬の中に附子が入っている場合は、40分以上しっかりと煎じるようにしてくださいね。



aconitine:アコニチン

四神湯・・・

四神とは、中国神話において、東西南北の各方位を司る神のことで、東は青龍、西は白虎、南は朱雀、北が玄武です。四神は、奈良県にある高松古墳やキトラ古墳の墓室にも描かれているので、ご存じの方も多いかと思います。実は、この四神の名前を持つ漢方薬が存在しています。これは、四神それぞれを象徴する色と、その漢方薬に含まれる、主となる生薬の色から命名されたそうです。

下記は、四神と守る方位と色、相当する漢方薬、そして色の元となった生薬の名前です。石膏と大棗は、生薬ニュースのバックナンバーがありますので、よければ是非一緒にご覧ください。

- 青龍（東・青）・・・小青竜湯、大青竜湯・・・麻黄
- 白虎（西・白）・・・白虎湯・・・石膏
- 朱雀（南・赤）・・・十棗湯（朱雀湯）・・・大棗
- 玄武（北・黒）・・・真武湯（玄武湯）・・・附子

ちなみに、玄武湯から真武湯に処方名が変わった理由ですが、避諱（ひき）という慣習に基づいています。避諱とは、君主や目上の人など特定の人物の実名を口にしたり書いたりすることを敬意を持って避ける慣習のことで、宋王朝においては避諱がかなり厳格に行われていました。これにより、当時皇帝の実名に使われていた玄武湯の『玄』という文字はその死後、使用禁止文字となり、『元』か『真』の字に書きなおすように定められ、玄武湯から真武湯という処方名が変わったといわれています。

附子を含む方剤・・・

しんぶとう

真武湯（新陳代謝が低下して体力虚弱な人の、下痢、腹痛、胃腸疾患など）

はちみじおうがん

八味地黄丸（疲れやすく、尿量減少または多尿、四肢の冷えまたはほてりがある人の、腎炎、腰痛など）

まおうぶしさいしんとう

麻黄附子細辛湯（悪寒を伴う発熱、頭痛、四肢に疼痛冷感あるものの、感冒、気管支炎など）